HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	ポスト・ソビエト時代のアゼルバイジャンにおける国家と宗教 : カフカース・ムスリム宗務局から見るイスラームの国家管理の諸相
Author(s)	岩倉, 洸
Citation	日本中央アジア学会報, 14, 32-33
Issue Date	2018-07-31
DOI	10.14943/jacas.14.32
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/88350
Type	article
File Information	JB014_006iwakura.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

ポスト・ソビエト時代のアゼルバイジャンにおける国家と宗教
── カフカース・ムスリム宗務局から見るイスラームの国家管理の諸相 ──

岩倉 洸

本報告の目的は、アゼルバイジャンのムスリム宗務局である「カフカース・ムスリム宗務局」の活動の検討を通じて、ソ連崩壊後のアゼルバイジャンにおける国家と宗教の関係について明らかにするものである。従来、アゼルバイジャンのイスラーム研究はイスラーム学、政治学、人類学、社会学の面から多くなされてきた。特に人類学、社会学においては民衆イスラームとその信仰実践に焦点があてられてきた。しかし、このことは民衆イスラームの影響力を過大評価し、政府やそれに近いイスラーム組織の影響力を過小評価する状態を引き起こしている。政府やそれに近いイスラーム組織の研究は、近年の政治的イスラームやテロなど、国家と宗教に関する重要な問題を解決する鍵である。しかし、そのことが真剣に検討されてこなかった。本報告はアゼルバイジャンを対象にそのことを議論するものである。

そもそも、アゼルバイジャンのイスラームは、他の旧ソ連圏と異なる点も多い。歴史的にサファヴィー朝の支配下にあったことから、シーア派の12イマーム派が6～7割ほどを占めている（他地域はスンナ派ハナフィー法学派が多数である）。また、イラン的なイスラーム急進主義への警戒が強いのも特徴であろう。しかし、法規則によるイスラームの信仰実践の制限、宗務局をはじめとした管理機構の存在、文化的なイスラームの称揚と政治的なイスラームの排除、権威主義体制下での管理など他の旧ソ連圏と比較できるような点も多々ある。

一方で、アゼルバイジャンを含む旧ソ連圏ムスリム地域では「並行イスラーム論」という議論があった。これは、ソ連のイスラームでは宗務局が管理する政府公認のイスラームである「公式イスラーム」とそれに管理されていないスーフィー教団を代表とする民衆イスラームつまり「並行イスラーム」があり、人員などの問題で後者の方が民衆への影響力があるとされてきた議論である。この議論は現代のアゼルバイジャンでも問題になっており、ラウルやサッタロフといった研究者がこれを批判して、「並行イスラーム」の多様性を示している。しかし、それでもなお宗務局の影響力は限りなく過小評価されているのが現状である。

では、アゼルバイジャンにおいてイスラームを管理する機構とはどのようなものがあるだろうか。これには大きく分けて政府系機関とカフカース・ムスリム宗務局が存在する。前者

で特に重要なのは宗教団体担当国家委員会である。この、宗教団体担当国家委員会はイスラームのみならず、アゼルバイジャンのあらゆる宗教を管轄する組織であり、主に宗教団体登録と宗教的刊行物の検閲によって宗教規制を行っている。しかし、この委員会の構成員はイスラーム学の教育を受けていない者が大半である。そこで、イスラーム学の面からサポートする組織がカフカース・ムスリム宗務局である。カフカース・ムスリム宗務局とは、アゼルバイジャンにロシア帝国時代から存在する、国家的なイスラーム管理のために、体制に忠実なウラマーを集め、彼らにムスリムを管理させる組織である。イスラーム組織の登録、イスラーム法学者の教育、一般民衆へのイスラーム知識の伝達などを行っている。この2つの組織がアゼルバイジャンにおけるイスラーム管理の両翼なのである。

しかし、これらの組織はただ強権的にイスラームを管理しているわけではない。政府や宗務局はある1つの「宗教モデル」に基づいて活動を行っているのである。そのモデルとは、「スンナ派優遇」を実質的に行う政策を、「宗派共存」を目的として、「社会秩序の維持」を狙うものである。これを報告者は「アゼルバイジャン・モデルのイスラーム管理」と呼称した。このモデルに基づく活動として、本報告では宗務局を例に、宗教教育の宗派を超えたカリキュラム、両派の同一モスクでの礼拝推進、宗務局の構成員におけるスンナ派の優遇、シーア派限定の信仰儀礼の制限などを示した。モデルに基づくこうした活動は、ある程度宗派間の対立防止の効果を果たしているのである。ただしこうした活動は、スンナ派優遇が過ぎる、政府との癒着、イスラームの解釈の保守性などで人々から疑問視されている面もある。

結論として、アゼルバイジャンの国家と宗教の関係は、管理・被管理の関係にあるが、その一方で宗教側からの限定的な関与があると言える。それが「アゼルバイジャン・モデルのイスラーム管理」という形で現れているのである。カフカース・ムスリム宗務局はこのような関係の中で、イスラーム学の視点から国家と宗教の関係を仲立ちしている。これは管理・被管理という形で起こりうる緊張関係の緩和にある程度の効果を発揮していると言えよう。

本報告では、カフカース・ムスリム宗務局を中心的に検討したが、他政府組織の活動や他旧ソ連圏との比較などの点については触れることはできなかった。これらの点に関しては今後の課題としたい。

（京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科）